

倅約とけちの違い

日本の経営の②に勤勉倅約誠実を挙げたが、勤勉と倅約は全く別のもので、項目を分けて述べたほうがいいと思った。石田梅岩も倅約を自著の大きい柱として書き記している。経済では消費を成長の数字にとらえ、浪費乱費を歓迎肯定する。梅岩がこれを知ったら怒髪天を衝くならん。

けちに徹して成功した仁兵衛

「七人の侍」が世界最高の映画だと紹介したことがある。二番目に私の心に深く刻まれているのが、二代目中村鷹治郎主演の「大阪物語」である。昭和三十三年（一九五七）封切の大映映画である。

「日本永代蔵」（井原西鶴）に載っている話が柱になっている。百姓仁兵衛は年貢米が納められず四人に追われる。家を捨て家族四人で夜逃げをする。

大阪で大きい店を構えている知人を頼るが、知人に塩をまかれ追いつ返される。仁兵衛と妻、十歳前後の息子と娘は家族ホームレスである。弱い人なら一家心中だろう。

米を積んだ船が堂島川を上り毎日、米蔵に荷上げする。俵からこぼれた米が土にまみれている。仁兵衛家族はその米を拾う。

効率をあげるため洗うちわと手箒を用意する。米粒の入った土を箒で掃き集める。指で一粒ずつつまむより早く数多くの米を集めることができる。四人が食べる分くらいは集められる。

初めは塀の外で、外にこぼれた米を集めていた。塀の内側のほうがたくさんこぼれている。番人に銭を渡して「中で取らせてくれ」と頼む。番人には落ちてくる米を

拾い集めるといふ発想がない。掃除の手間も省けるので塀の内側での作業を許す。生産が一挙に三倍に上がる。

十年後、仁兵衛は「近江屋」という屋号の居を構えることができた。十年間米を拾い続けて、自分たちは芋と粟を食べ、米を売って銭を蓄えたのである。

近江屋はお茶を扱い両替商を営む。息子娘にごみ箱あさりさせ茶の出しがらを集める。それを裏庭に広げて乾かして新しい茶に混ぜて量を増やして売る。食品偽造である。

仁兵衛のケチは度を超している。草履をひきずって歩くこと減りが早いからそとと歩くと指導する。妻が病気になる。「どうせ死ぬんだ」と薬を与えない。妻がなくなった。通夜の客にお清めの酒と食物を出さない。お茶だけ。金蔵に金が貯まっていた。

大阪に出て来た時けんもほろろに追い返されたその大店が潰れ、その店を仁兵衛が買い取った。仁兵衛の自信に満ちたケチ人生。

息子の友人が女郎に惚れ、心中しそうな気配。息子が一肌脱いで友人に女郎を身受けさせる。その身受け金を店の金庫から盗み出す。仁兵衛が食う物も食わずけちに徹して貯めた金二千貫。ごっそり

持ち出し友人に身受け金を渡し、残った金で豪遊する。仁兵衛は金蔵に金がないのを知って狂い死ぬ。

経営講座 318 染谷和巳

にした。遊びは人並みにするが、浪費散財はしない。儲けたお金を使おうなら、自分の楽しみのためでなく、社員のため、世間のために使う。倅約は単なる個人の美德ではなく、経営の根底に流れる精神だと社長は思う。だからその精神が全社員についていない息子を嘆き悲しむのである。

私はこの社長に共感する。貧しく育ったせいでも私にも「倅約」が染み付いている。「蓄財」と「浪費」が一般的になったのは元禄時代（一六八八—一七〇四）以降である。町人文化の隆盛の時代といわれている。貨幣の流通が活発になり、商人の中から紀伊国屋文左衛門のような豪商、大店といった「金持ち層」が台頭した。

この層が栄耀栄華の生活をし、庶民は「自分もあなりたい」と羨ましがらる。金持ちは貪欲であり、さらに儲けて自分の財産をふやそうとする。そのため平気で庶民を泣かす。法に触れる悪業もする。貯め込んだ金銀財産を眺めて、「己の力」に酔いしれる。これが「ケチ」の究極の姿である。

一方、名誉を得るために見栄を張る。人々から注目され尊敬されたいために豪邸を構え、きらびやかな絹物を着、珍味珍品を食し、寺社などにこれみよがしに寄進をする。「どうだ、私の力は」という本心が見え見えである。

また金に物を言わせて女遊びに興じ、妾を囲う。これは散財だけでなく、家を乱し、商売不振の原因になる。当時の金持ち商人は三十年後には八割が消滅していたという。パツと花咲いてパツと散ったのである。

こうして世相を見て石田梅岩は「倅約奇家論」を書いた。「名聞と利欲と色欲」が家を潰すと警告した。家（会社）は打ち上げ花火であつてはならない。健全に子孫に引き継ぎ長く栄え続けるものでなく

てはならない。「倅約をいふは畢竟身を修め家を」と、のへん為なり」と梅岩は言う。「世界に三つ要る物を二つにすすむようにするを倅約という」と言う。

日本的経営の生命線倅約精神

「息子は社長にはしません」と中堅企業の創業社長が言った。五十分出しているが、毎週競馬をするし、酒を飲むのも高級な所なので小遣いが足りない。仮払い金がある。関西に三日間出張したことがある。一泊三万円のホテルの領収書を持って来た。私だって仕事の出張の時ビジネスホテルに泊まる。「こんな高いホテルに泊まることないだろう」と問い詰めると「いいホテルは安全だから」と答えた。それは安全だろうが、一万円以下のビジネスホテルだってそんなに安全は変わらない。格好つけてゼイタクしているだけだ。こんな金銭感覚で経営したら会社はすぐおかしくなる。息子は社長の器ではないんですよ」

社長はこんな話もした。社長は苦労して会社を大きくしてきた。倒産寸前の危機もあった。元々質素倅約の人だったのが、こう

した経験が倅約精神を強固なものにした。遊びは人並みにするが、浪費散財はしない。儲けたお金を使おうなら、自分の楽しみのためでなく、社員のため、世間のために使う。倅約は単なる個人の美德ではなく、経営の根底に流れる精神だと社長は思う。だからその精神が全社員についていない息子を嘆き悲しむのである。

「蓄財」と「浪費」が一般的になったのは元禄時代（一六八八—一七〇四）以降である。町人文化の隆盛の時代といわれている。貨幣の流通が活発になり、商人の中から紀伊国屋文左衛門のような豪商、大店といった「金持ち層」が台頭した。

この層が栄耀栄華の生活をし、庶民は「自分もあなりたい」と羨ましがらる。金持ちは貪欲であり、さらに儲けて自分の財産をふやそうとする。そのため平気で庶民を泣かす。法に触れる悪業もする。貯め込んだ金銀財産を眺めて、「己の力」に酔いしれる。これが「ケチ」の究極の姿である。

一方、名誉を得るために見栄を張る。人々から注目され尊敬されたいために豪邸を構え、きらびやかな絹物を着、珍味珍品を食し、寺社などにこれみよがしに寄進をする。「どうだ、私の力は」という本心が見え見えである。

また金に物を言わせて女遊びに興じ、妾を囲う。これは散財だけでなく、家を乱し、商売不振の原因になる。当時の金持ち商人は三十年後には八割が消滅していたという。パツと花咲いてパツと散ったのである。

こうして世相を見て石田梅岩は「倅約奇家論」を書いた。「名聞と利欲と色欲」が家を潰すと警告した。家（会社）は打ち上げ花火であつてはならない。健全に子孫に引き継ぎ長く栄え続けるものでなく

てはならない。「倅約をいふは畢竟身を修め家を」と、のへん為なり」と梅岩は言う。「世界に三つ要る物を二つにすすむようにするを倅約という」と言う。

蓄財に血眼になり浪費が横行している会社は危ない。日本的経営の特性の一つである倅約が徹底している会社は優良企業である。

「倅約奇家論」の影響は大きく長く続き現在に至っている。